

# 岩手県自殺対策推進センター ニュースレター

No. 102 2023. 3. 1

精神障害者支援の現場から  
フィールドレポート!!

発行：岩手県精神保健福祉センター・岩手県自殺対策推進センター

このニュースレターは、県内に拡がりつつある自殺対策支援の輪を強化するため、地域の自殺対策のノウハウに関する情報を発信していきます。

バックナンバーはこちらからご覧いただけます →



## ニュース

令和5年2月10日に厚生労働省から発表された「警察庁の自殺統計に基づく自殺者数の推移等」によると、全国の令和5年1月の自殺者数は1,715人（速報値）で、対前年比1人（約0.1%）増になりました。岩手県の令和5年1月の自殺者数は21人（速報値）で、**対前年比5人（約31.3%）増**になりました。全国と比べ、今回は岩手県は増加いたしました。3月は「こころに寄り添い いのちを守る いわて」月間です。より一層の取り組みが必要です！！

	令和4年1月（暫定値）		令和5年1月（速報値）		自殺者数対前年比	
	自殺者数 （人）	自殺死亡率	自殺者数 （人）	自殺死亡率	自殺者数 （人）	増減率 （%）
全国	1,714	1.4	1,715	1.4	1	0.1
岩手	16	1.3	21	1.8	5	31.3

発表されたデータはこちらのページから参照できます。厚生労働省）～自殺対策）～自殺の統計：最新の状況  
[http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi\\_kaigo/shougaisahukushi/jisatsu/jisatsu\\_new.html/](http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaisahukushi/jisatsu/jisatsu_new.html/)

## トピックス

### ◆令和4年度 若年層の自殺予防研修会を開催いたしました

岩手県精神保健福祉センターでは、若年層の自殺予防に必要な知識について理解するとともに、子どもを取り巻くメンタルヘルスの現状について情報共有することを目的として、2月3日に「令和4年度若年層の自殺予防研修会」を岩手県教育委員会の後援で開催しました。Web会議システムZoomによるオンライン開催でしたが、参加者は200名を超え、多くの方が若年層の支援に課題意識を抱いていると認識しました。

研修会では、児童相談所、岩手県教育委員会、北上市の担当者から『子どもを取り巻く現状と課題』について話題提供をしていただきました。参加者からは「専門機関から現状や意見を聞き、組織同士の連携を進めていく上で参考になった。」等感想が聞かれました。

また、未来の風せいわ病院理事長の智田文徳先生から『若年者のメンタルヘルス課題と支援～臨床現場やSOSの出し方教室実施の現場から～』についてご講義をいただきました。

参加者からは、「子どものメンタルヘルスについての支援に課題を感じながらも、学ぶ機会がこれまでなく、研修会に参加し勉強になった。」等感想が聞かれました。



未来の風せいわ病院

当センターでは、若年層の自殺予防について情報共有し学ぶ機会の必要性を改めて認識したところです。

関係者とともに連携しながら若年層の自殺予防に関する支援の充実に向けて、今後も取り組んでいきたいと考えております。

## フィールドレポート

### テーマ:精神障害者支援の現場から

### 「包括的自殺対策プログラム～精神障害への対策～」

今回は、実際に障害者支援に取り組んでいる3人の方にインタビューを行い、支援の現状についてお話しいただきました。

社会福祉法人 大洋会 就労継続支援事業所 星雲工房  
工房長 吉田 展泰

陸前高田市出身。介護福祉を学び、その後、大洋会に入職。星雲工房が通所授産施設だった頃から支援に携わる。地域生活支援センター、相談支援事業所の相談支援専門員などを経て、現職に至っている。



**Q. コロナ禍が長期化していますが、精神障害者への支援について課題はありますか？  
また、最近の相談傾向について教えてください。**

コロナの影響により、地域イベントが中止・縮小となり、製品を販売する機会が少なくなりました。また、受注量の減少、施設外での作業制限なども重なり、厳しい稼働状況です。

作業などの活動が制限されたことで、利用者の精神面への影響もあったと感じています。

事業所では、菓子の製造・販売、電子部品の組み立て、清掃の仕事をしています。1日平均20名程度の利用者がおり、男性が6割ぐらい、女性が4割ぐらいです。

主力の製品は、製菓です。現在、販売活動を一部自粛していますが、コロナの感染状況等を確認しつつ、徐々に活動を再開し、販路拡大を図っていきたくと考えています。

支援の課題として感じていることは、生活課題を抱えている利用者への対応です。これはコロナの影響とは別ですが、65歳を過ぎた利用者の支援で、障がい福祉サービスから介護保険へのつながりが課題と感じています。利用者の状態像にもよりますが、これまで障がい福祉サービスを利用していた方が介護保険になると、介護度が要支援1しかつかないなど、支援が薄くなってしまうことが現状です。



**Q: 岩手県は自殺死亡率が高く推移している県であり、県民と一体になって自殺対策に取り組んできましたが、今後さらに必要とされる取組はありますか？**

支援者だけではなく、身近な人が、周囲の人の異変をキャッチできることや、話を聴いてくれる存在となることが必要であり、改めてゲートキーパーの役割が必要と感じています。

また、支援が必要な方に対して、分野が違うということで縦割りの対応となり、支援を丸投げしてしまう現状も見受けられます。分野は違えど、まずはインテークして課題を整理してから次につなげるなどの協働する仕組みや、支援者が支え合えるシステムがあればいいと思います。



奥州市出身。大学卒業後、地域活動支援センター友とぴあの前身である「精神障害者地域生活支援センター水沢」が発足した時に入職。この分野に飛び込んだのは、様々なボランティア活動を行っていた経験から。「自分探しをしていたんでしょうね。支援は奥が深く、利用者さんの人生から学ばせていただいている。」と話す。

#### Q. コロナ禍が長期化していますが、精神障害者への支援について課題はありますか？

また、最近の相談傾向について教えてください。

コロナは、誰にとっても未知のことであり、ワクチンや感染に不安を抱く方も多かったです。また、一人暮らしの方からは、感染したらどうしようという相談もあり、お話を伺いつつ情報を整理して伝え、不安を緩和するように努めました。

現在の相談傾向に大きい変化は無く、人間関係のこと、日常生活のちょっとしたことなどのお話が多いです。最近、奥州市では、就労継続支援 A 型事業所が増えました。シイタケ栽培や LINE のスタンプを作成・販売、ハイヒールの製作や喫茶など様々な作業があり、利用に関する対応も増えています。

地域活動支援センターでは、メンバーが互いに情報交換している中で、障がい福祉サービスの利用に対する心理的ハードルがだいぶ下がり、利用が増えたと感じています。

当事業所では、令和 3 年度から、自立生活援助事業を始めました。利用者は 3 名ほどですが、安心できる生活のお手伝いをしています。一緒にエアコン掃除をしたり、初めてのお店に一緒に行ったり、足の爪のケアをしてくれるサービスを探したりと、その方の生活の様子を伺って、いろんなことに一緒に取り組んでいます。

昨年 10 月、友とぴあは 20 周年を迎えました。奥州市内のホテルでセレモニーを開催し、メンバーや関係機関の多くの方から「おめでとう！ありがとうございます」のお言葉をいただきました。現在は、約 120 名の方が登録していて、メンバーの 9 割は精神障がいの方です。

#### Q. 岩手県は自殺死亡率が高く推移している県であり、県民が一体となって自殺対策に取り組んでいます。今後さらに必要とされる取組はありますか。

まじめで頑張り屋、人に迷惑をかけないようにという県民性が、よくわからないですが、裏目にでてしまう傾向もあるのかなと感じています。一人一人が当たり前に行っていることでも、当たり前ではなくて、もう十分に頑張っていると自覚することも必要ではないでしょうか。多くの方が、自分のできていることを認識し、自分自身を承認してあげることが大切だと思います。

そのための取り組みとして、自慢大会みたいなものやってもいいかと思っています。例えば、のど自慢があるように、ペット自慢や自分のプチ自慢、失敗自慢とか、そういう場があると、笑いを交えながら自他を認めることにつながるかもしれません。

自殺を、自分ごととして捉えることも必要だと思います。かまえる必要はないのですが、自分の身近に起こるかもしれないと頭の片隅にあれば、人との関わり方も変わってくるのではないのでしょうか。



## 盛岡広域圏障害者地域生活支援センター（My夢）

所長 工藤 宏行くどう ひろゆき

大学卒業後、社会福祉法人 千晶会へ入職。入所系サービスに10年従事し、その後、在宅系サービスに従事。地域をフィールドにコーディネーター等の役割を担う。入職後は知的障害者への支援がメインであったが、現在は、支援対象者の8割は精神障害者である。プライベートでは、グループホームに自宅を併設し、入所者とともに暮らしている。



### Q. コロナ禍が長期化していますが、精神障害者への支援について課題はありますか？

また、最近の相談傾向について教えてください。

コロナ禍の影響というよりも、利用者が急増しています。入職当時は、知的障害者への支援がメインでしたが、障害者自立支援法、障害者総合支援法の施行により、精神障害者への支援が開始されるようになり、関わるようになりました。

現在では、盛岡広域圏障害者地域生活支援センター（My夢）の支援の対象者は、8割が精神障害者であり、特にここ10年で増加しました。

以前は、中年期以降の統合失調症の患者さんのサービスの調整が主でしたが、現在はニーズが多様化し、発達障害を抱える若年者の相談も多くなっています。

サービスの利用で言うと、ホームヘルプサービスの利用が一番多いです。サービスの利用を巡り、利用者ヘルパー事業所で、支援についての認識にずれがある場合もあり、トラブルが増えてきています。その際は、事業所と利用者との調整を図ったりします。最近では、地域包括支援センターから相談につながる人が増えています。

また、サービスを提供する事業所も増え、自分自身、その把握が大変です。

特に、発達障害児の増加により、放課後等デイサービス事業を行う全国チェーンのフランチャイズや、就労継続支援事業所の仕事の多様化が進み、AI関連の業務や、事業所での製品をオンライン上で販売し、販路拡大を図る事業所もあります。障害者支援の現場においても、デジタル化が進んでいます。

盛岡圏域で言うと、精神障害者のグループホームが増え、退院先の選択肢になっています。

しかし、精神障害者の方々は、グループホームでの生活よりも、アパートでの一人暮らしを望む方も多いのです。他の障害に比べてグループホームの回転率が速いと感じます。

コロナ禍での支援で大変だったことは、感染拡大の初期において、直接対面での面談や、サービス利用にあたり見学や体験ができないということでした。それにより、イライラ感を示す利用者も見られました。現在は、感染症対策を講じながら実施しています。

### Q. 岩手県は自殺死亡率が高く推移している県であり、県民と一体になって自殺対策に取り組んできましたが、今後さらに必要とされる取組はありますか？

最近感じていることは、地域のつながりを、今の社会情勢に合わせて作っていくことが必要と感じています。これまでは、当事者会など同じ障がいの方が集まることが主流でしたが、これからは、地域のコミュニティの中で支援する仕組みができればよいと感じます。

イメージとしては、子ども食堂のようなもので、対象は子どもだけではなく、シングルマザーや、困窮を抱える方、一人暮らしの高齢者、ひきこもり者など、地域で様々な困難を抱える方がその地域で支援を受けられる、そんな風になればいいなと感じています。